

# ハーバード滞在録

加藤 久和

## 1. はじめに

平成7年9月から8年3月まで、ハーバード・ジャパン・エネルギー・環境プロジェクトの一員として、米国マサチューセッツ州ケンブリッジ市にあるハーバード大学ケネディスクール（大学院）に客員研究員として滞在した。ハーバード・ジャパン・プロジェクトは、ハーバード大学の D. ジョルゲンソン教授及び W. ホーガン教授らと日本のエネルギー・環境問題に関心を持つ企業との共同研究として運営され、毎年1月には東京において研究発表会が開催されている。この他、毎年数人の日本側の研究者・実務家がケネディスクールに滞在し、研究を行っている。拙文ではケンブリッジ滞在中に見たこと、聞いたこと等を中心に報告してみたいと思う。

## 2. ケネディスクールの一日

ケネディスクールの朝は早い。学生が8時半からの講義を受けにくる前に、ホーガン教授はその約1時間前からオフィスに立ち寄り、講義の準備を始めていた。私のオフィスは教授と同じフロアに位置していたので、私が朝8時すぎに顔を出すと、教授がいつも「おはよう、カズ。調子はどうだ。」と聞いてくれる。ある朝、今日こそは逆に「おはようございます、教授。調子はいかがでしょう。」と挨拶をしようと7時にオフィスに来て、やはり教授に先を越されていた。教授は、ハーバード大学で教える傍ら、いくつもの電力会社の顧問を勤めるなど、最近の電力市場自由化の理論的先駆者として著

名な方でもある。そんな教授が、大学院1年生に教える計量経済学の初歩の授業の準備のため朝早くから準備を進めているのである。

ケネディスクールでの講義は真剣勝負である。ある日、講義に出ようと準備していると、「今日は学生による講義の評価を行うからね」とホーガン教授のスタッフのコニーに言われた。教室では質問紙が渡され、講義のわかりやすさ、コミュニケーションの有無、話すスピードなどあらゆる項目の評価を5段階で学生が記入していた。一方で、教授の講義の進めかたも厳しい。中間・期末の2回の試験の他、講義の度に膨大な宿題をこなさなければならない。学生の多くは大学院をより待遇のいい企業等への就職のチャンスを得る場所と心得ているから成績に非常にこだわる。マイクロエコノメトリックスの実証分析で有名な D. ワイズ教授のクラスでは当初50人程度いた学生が1ヶ月後にはほぼ半減していた。いい成績をとれないと悟った学生がみな棄権したのである。

米国は日本と異なった意味で学歴社会である。日本では有名大学卒を競うが、米国では修士や Ph.D の資格が一流企業への入場券となる。私が知り合った学生もケネディスクールで行政学修士を取得した後、MBA を取得したり、ロースクールへ再入学するといった計画を持っているという。そんな彼らであるから、ケネディスクールでの勉学も目を見張るものがある。学校の図書館は午後11時まで開館しており、治安面の不安も少ないから夜遅くまで勉強をしている。それでも Ph.D の取得は難しい。ケネディスクールの認定する Ph.D を取得できるのは約3割であり、

平均して7~8年かかるという。オフィスで友人になったドクターコースを履修しているステイブンは既に4年間経過しているが、「あと4年で取得できれば問題はない。」と言っている。少なくとも研究者の端くれになるには Ph.D は必要不可欠であり、どんなに面白い研究をしてもドクターを持っていない人間は半人前なのである。

### 3. 研究環境と研究姿勢

ケネディスクール滞在中、資源・環境の経済学について学んだ。ハーバード大学には一般均衡モデルで地球温暖化と経済成長を研究している D. ジョルゲンソン教授、成長の持続可能性や生物多様性などの理論分析を進めるワイツマン教授など高名な研究者が数多くいるとともに、近接する M.I.T. から研究者を呼んで、週1回、環境・エネルギー経済学のセミナーが開催されていた。ここでは個々の研究成果の発表のみならず、最新の話題や研究対象などについて活発な議論が行われていた。彼らは周囲にいる競争相手あるいは共同研究者の輪を大事にして、いわばネットワークを重視した研究をしている。勿論、個々の研究者は一流であることに違いはないが、「集積の経済」を十分に生かした研究を行っている。そのための議論は時には辛辣であり、時には喧嘩腰になることもあるという。しかし議論そのものは生産的であり、こうした環境が良い研究を生む土壌となっていることを身をもって知り、当所においても一層議論し、切磋琢磨することの必要性を痛感した。

研究に対する姿勢も真摯である。終身雇用権を既に手に入れ、数多くの一流学術誌に論文を発表している研究者でさえもハードな研究生活を送っている。ジョルゲンソン教授でさえもその例外ではなく、ノートパソコンを片手に少しでも時間があれば新たな論文執筆をしている。

ケネディスクールで日常面から研究環境に至るまで世話になったコニーは「研究者はハードワークしなければだめ。」といつも私を鼓舞してくれた。そのおかげで、まがりなりにも滞在中に経済成長と資源・人口問題の論文を書くことができたと感じている。一方で、米国では研究者は自分の研究が社会的にどのように評価されるかについては非常に神経質である。研究が評価され、企業が資金を提供してくれる教授には広い個室と多くのスタッフがつくが、資金を得られない研究者は通路沿いの狭い、景色も見えない一室で過ごさなければならないという。こうした点についても、多々見習うべきことがあると感じた。

### 4. おわりに

ケンブリッジ滞在中、その近隣にあるベルモントという町に住んでいた。ベルモントは皇太子妃の雅子様を通った高校があることでも有名である。雪深い冬（実際は20年振りのブリザードに見舞われるなどで、こんなきれいな言葉だけでは言い表せないが）を過ごしたが、緑も多く残っており、その中で自然に親しむ生活を営む近所の人々、子供の小学校を通じて得た友人、親切なオフィスの人達、さらにはケンブリッジで得た日本人の知己など、様々な人に出会った。それはまがうことのない自分自身の財産である。そして、研究者としての在り方、姿勢などを一流の教材を通じて知り得たことがこの滞在の最大の成果であったと思っている。次回は請われてケンブリッジに滞在できる研究者としてここを訪れるのだという決意を胸に帰国の途についた。

（かとう ひさかず  
一般経済グループ）